



# 三題噺



小高まあな

## 「生徒会長」「トランシーバー」「魔界」

---

そこは、『魔界』と呼ばれていた。

「よし、今から突入する、オーバー」

右手にもった機械に囁く。これ、ケータイ電話だけど。相手いないけど。気分だ気分、こういうのはトランシーバーの方がいい。

深呼吸をして勢い良くドアを開け放つ。

「たのもー！」

上から黒板消しが降ってきた。て、典型的なっ！真っ白になった視界に驚いている間に、誰かに蹴り倒された。

「また来たの？懲りないわねえ」

魔界の王者は小悪魔な笑みを浮かべて言った。

「何度来ても、無駄よ。正規の手続をとってない、要件を満たさない同好会を部にすることはできません」

「そこをなんとか！生徒会長のお力で！」

「無理です！不正をするなんてこと、トップに許されないでしょう！」

キッと睨まれる。

「帰りなさい」

言われてすごすごと帰る俺。頭の上、チョークの粉を払う。人を蹴り倒すのは許されるのかよ、と思ったけど言えない。魔王、怖い。

## 「ウナギ」 「電話」 「弾幕」

---

「久しぶり」と電話の向こうで彼は言った。いつものように微笑んでいる姿が目に浮かぶ。近状報告を彼がする。マシンガントークだ、と思う。言葉が弾丸のように飛んでくる。弾幕をぬって私は私の近状報告をする。喋り続ける。沈黙が怖いから。

「美味しい鰻のお店をさ、見つけたんだ。今度一緒に食べに行こう」

私は、楽しみにしていると微笑んだ。全部嘘。小さな嘘。

じゃあまたね、といい受話器を置く。テレホンカードを手にとると、私は病室へと戻った。出来ない約束をする、可愛い嘘。

蛇を連想させる女、というのが第一印象だった。

体温を感じさせないところや、するりとした、しなやかな動き。それから、目力。

彼女は唇の端をぐっと上にあげて、こっちをまっすぐに見つめて笑う。蛇に睨まれた蛙、だ。

何も言えずに、彼女が扇状に広げたカードを一枚とる。スペードのK。それを彼女の手元に戻す。彼女は微笑んだまま、扇を閉じた。

「私はこれから、カード達と会議を行います」

そう宣言すると、山となったカードを額にあてて瞳を閉じる。身動き出来ずにそれを見守る。

「わかりました」と宣言し、山の中から一枚のカードを取り出した。

スペードのK。

正解、と言おうとした途端、彼女はそのカードをびりびりに破いた。そして代わりにカードの山を崩す。

表を向いたカードは全て、ハートの10だった。

「トランプの中で一番ハートが多いカードよ」

そうして、唇の端をぐっと上にあげて、こちらをまっすぐに見つめて笑う。蛇に睨まれた蛙、だ。何も言えずにいと、「わかったでしょう？貴方、私と付き合いなさいな」そうしてびりびりに破いたスペードのKすらも、ハートの10にかえてみせた。

## 「フリル」「火事」「酒場」

---

女の子が住んでいる森から、一番近い町。そこには、小さいながらも繁盛している酒場がありました。開けるといつも、アルコールと汗と、大人の匂いがして、女の子は酒場があまり好きではありませんでした。出来る事なら、行きたくありませんでした。

ある日、酒場が火事になりました。その酒場あっという間に全焼しました。飲んでいた大人達は、大けがをしました。女の子は、大事な大事なフリルのついたワンピースをしっかりと胸に抱えると、燃え盛る酒場を後にしました。

走って逃げ出して、森の中のお家を目指しました。でも、お金を持たずにお家に帰ると、お父さんに怒られることもわかっていました。酒場から持ち出したアルコール度数の高いお酒と、マッチ。だから、その二つを、大事な大事なフリルのついたワンピースと一緒に抱えて走りました。

女の子は今、児童自立支援施設に居ます。

## 「棺」「王様」「風呂」

---

水の少ないこの町で、王様は一日三回の入浴を欠かさなかった。贅沢の限りを尽くした、王様専用の風呂にたっぷりのお湯をはって。民は飲み水にさえ困っているのに。王様は干ばつの時期だって一日三回の入浴を欠かさない。

数十年ぶりの大干ばつ。民は武器を手に取り立ち上がった。

クーデターは成功。哀れ王様は、湯船につかったまま首を刎ねられた。豪華な風呂が王様の墓場。王様の棺。

## 「パート」「校庭」「バイオリン」

---

彼は、自分の事をパートだと言っていた。パートタイム労働者だ、と。だからこれでお別れだ、と。

「最後に聞かせてよ」と、彼は微笑んだ。

私は自分の相方を取り出す。校庭の花壇に腰掛けて、彼は目を閉じた。私は精一杯、一生懸命、相方のバイオリンを弾いてみせた。この一年で上達した、彼のおかげで上達した、私の音を聞いて欲しかった。

演奏が終わると、上手になったね、と彼は笑って去って行った。彼は一年間の短期契約の講師。ここは高等学校音楽科。彼から見たら私はただの生徒で、ただのお子様。それだけ、だ。

ラノベって言うと魔術って感じだなー、と言った。

「剣と魔法の世界ってこと？」と彼は首を傾げた。

「まあ、確かに多いよね。でも」

彼はにっこりと微笑む。柔らかい笑顔。私の好きな顔。それにつられてにっこりと微笑む。

彼は微笑んだまま早口で告げる。

「でも、最近ではそんなでもないよ。RPG的な異世界ファンタジーの方が少ないんじゃないかな？ 最近映画化したやつはエブリディ・マジックって言われるものだし。異類婚姻譚はあんまり見ないけど、落ちもの系は形を変えて残ってるよね。君が好きな」

と私に視線を移し、私も見ていたアニメの名前をあげた。

「あれが流行ったあたりからセカイ系も増えたよね。ま、最近では現代学園異能や空気系に変わったって言うけど」

ぺらぺらと喋り続ける。

ごめん、何の呪文？ それとも暗号？ 頭を疑問符がしめるけど、楽しそうに喋る彼が愛おしくて、可愛くて、黙って聞き役に徹する事にした。

ちょっとずれてるけど、夢中な彼は輝いてる。



私は彼が帰ってくるのを首を長くして待っていた。ずっと立ち続けて待っているの。

彼が領主の娘、あの女のところから、あのファイルを、魔のファイルを、私たちを縛り付けているあのファイルを、持って帰ってくれば、奪ってくれば、私たちは自由になれる。だから、私は彼が帰ってくるのを首を長くして待っている。家の前で立ち続けて待っている。

彼があの子の屋敷に潜入してから、もう半年以上経つけど。風の噂で、彼はあの子の色香に惑わされたと聞いたわ。彼の大好きな日本酒をたらふく飲ませて、あの子が強引に関係を持ったとも聞いたわ。でも、私はそんな噂は信じない。

私たちを縛り付けているあのファイルを、彼が奪い、持って帰ってくるのを待っている。そして、私と彼は二人でこの町を出て行くの。自由になってこの町を出て行くの。

だから、私は待っているの。彼が帰ってくるのを、首を長くして。屋敷の方をみて立ち続けながら。たとえ、首を長くしすぎて麒麟になってしまっても、立ち続けた結果足が根っこになってしまっても、私は彼を待っているの。

「ようこそ、いらっしゃいました」

と、目覚めると少女が、鈴を転がすような声で言った。何を言っているのだろう。地べたに転がって、金髪碧眼の少女を見上げる。

なんか、RPGに出てきそうな服装しているな。超可愛いし。ぼんやりと思う。

「貴方が、我が国を救ってくださる勇者様ですね」

少女は俺の隣に膝をつき、俺の右手を両手で握った。潤んだ瞳。よくわからんけど、美味しい状況？ ゆっくりと上体を起こす。

「あの、なんの話ですか？」

「ああ、勇者様」

というか、何故言葉が通じるんだろう、ここ日本？

「貴方は司祭様の呪文によって召喚された勇者様ではないですか」

「は？」

ええっと、そもそも目を開ける前に俺は何してたんだっけ？

そうだ、生徒会長から用があるから来なさい！！ って言われてたんだ。だから放課後、生徒会室のドアを開けたら、なんか怒った顔をして生徒会長がこっちを見ていた。

足を踏み入れて、何故か転がっていたバケツに足をとられた。頭からこけそうになる。生徒会長が焦ったような顔をしてこっちにむかってきて、そこまでは覚えてる。

「勇者様？」

「はい」

少女は嬉しそうに頷く。生徒会長に顔似てるな。

ああ、わかった。これはマジでゲームの世界なんだ。

俺は騎士としてこの国を救うんだな。っていう、夢だなきっと。頭打ったからなー。起きるまで話に乗ろう。

「うん、とりあえず分かった。で、俺は何を倒せばいいの？」

「？ 倒すって何のことですか？」

少女は微笑んで続ける。

「勇者様はこの国の法制度を整えてくださるんですよね？ 宜しくお願いします」

深々と頭を下げられる。

は？ 確かに将来弁護士になりたいけど法整備とかなに？ そんなゲーム知らないな。

とりあえず、はやく目が覚める様に祈った。

## 「オリンピック」「信号」「10円」

---

俺の名前は、杉沢五輪。オリンピックイヤーに生まれ、親のテンションが高いままつけられた名前だ。

残念ながら、運動はからっきし駄目なんだが。

小さい頃から、絶対に信号を守り、自転車は押して渡るような、落ちていた金銭は10円でも交番にとどけるような、そんな子供で、マジメメガネが渾名だった。メガネかけてなかったのに。

今は高校生で、一応弁護士を目指している。マジメメガネなどと呼ばれることもなく、楽しい高校ライフを送っていた。

あの日までは。

あの日、クラスメイトでもある生徒会長に生徒会室に呼びだされた俺は、何故か転がっていたバケツに足をとられ、後頭部を強打した。

次に目覚めた時には、ファンタジーな格好をした金髪美少女が俺の目の前で、瞳を潤わせて言った。

「ああ、勇者様。どうぞ、法のない我が国に、法律をつくってください」

夢オチを期待したのに、未だに夢からさめず、俺、杉沢五輪はよくわからんファンタジックな世界で、法律を制定する勇者として活動している。今はとりあえず、風習とか文化を学んでる。俺の世界とは違いすぎて俺の知識は欠片も役にたたない。

.....ああ、いつになったら帰れるのでしょうか。

パートのおばさんが亡くなった。

しばらく無断欠勤が続いていて、社員は皆怒っていた。

突然の病気によるもので、近所の人が不信に思ったらしい。家族もいなかったそうだ。

先日、新しいパートのおばさんを雇った。前のおばさん程使えないと、社員が愚痴っていた。

身寄りのないおばさんの部屋を片付けるように頼まれた。もともと綺麗に片付いていたけれども。

大家さんは愚痴愚痴言っていて五月蠅かったので、途中から一人で受け持った。

一つのUSBメモリが出てきた。悪いと思いつつ、興味をかられて日記と書かれたフォルダを開いた。

中には皆の体の調子の心配や好きな食べ物、何気なく欲しいと言ったもの、仕事での失敗、成功など、私達のことをよく見ていないとわからないことが書いてあった。

そういえば、おばさんはいつもさりげなく好きなお菓子をくれたし、具合が悪いときは大変な仕事を変わってくれていた。

私はおばさんの下の名前も知らないことに気づいた。

おばさんの家の古い給湯器からは水しか出てこない。

彼女は魔王と呼ばれていた。

生徒会長の彼女は、融通が利かなくて、怖い事で有名だった。生徒会室は魔界とも呼ばれていた。真面目真面目できっと彼女は恋なんてしないんだろう、と噂されていた。

しかし、なんの因果か、はたまた呪術か。彼女が好きになったのは、彼女と衝突の多い男子生徒だった。

いつもつかかってしまうけど、今日こそは！ 恋愛沙汰なんて久しくなかったけど、正直小学生以来だけど。

だから今日、魔王は彼を魔界に呼び出した。告白するために。

大きく息を吸って、吐く。

勇者に攻められる魔王だってきつとこんなには緊張しない。

足音がする。彼女は扉を睨んだ。

彼が勇者なら、魔王は倒されることだって厭わない。

「台風」「テレビ」「バイオリン」（会話文のみ）

---

「ね、テレビつけて？ 明日は本当に台風？」

「みただよ」

「……そう。ありがとう、消していいよ」

「我が俣だなー」

「子供の頃ね」

「うん」

「バイオリンを習っていたのよ」

「へー、初耳」

「すぐやめちゃったから。先生が恐くて、お稽古に行くのはあんまり好きじゃなかった」

「うん」

「一度、お稽古の日が台風で休んだのよ。そしたら、先生からやる気があるなら台風でも来いって電話があったの」

「スパルタだねー」

「うちの親、過保護だったし。それで親が怒ってやめることになったんだけど」

「うん」

「今でも台風が来るとあの時のことを思い出す」

「……悲しいの？」

「え？」

「そんな顔をしてる」

「そうでもないよ。それに、明日の台風は嬉しいかな」

「なんで？」

「だって、帰らなくてもいいじゃない。ね、明日は休みだし一日居てもいいよね？」

## 「熊」「対決」「北海道」

---

新婚旅行に北海道に行きたい、と言ったら全力で止められた。

「なんで？」

「だって、北海道には熊がいるんだよ、危ないじゃん」

「何それ？ 本気で言ってるの？ 意味分かんない」

旦那と本気で対決。

「北海道は駄目、熊いるんだから」

結局、アフリカになりました。

## 「フリル」「茶髪」「タオル」

---

タオルに髪の毛がついていた。私のも彼のもない、茶髪？

一つ息を吐き、それを洗濯機に放り込んだ。

私が彼にとっても最早家政婦でしかないことは重々承知している。彼が好きなのは女の子らしい女の子、レースやフリルが似合う女の子。きっとそういう子を呼んだのだろう。

彼に呼ばれた。別れ話？

「結婚しない？」

じゃあ、あの髪はなんなんだ、と問いつめる前に

「この子も一緒に」

陰からそっと渡された。小さな子犬。さっき見た茶色。

「……ばっかじゃないの」

思わず呟いた。泣きそうになって、その暖かいぬくもりに顔を押し付けた。

「わんっ」



## 「ウナギ」 「宝箱」 「980円」

---

980円で買った宝の地図。

小学校の裏で怪しいおじさんが売っていた。僕とユウ君とヒロ君で、お小遣いをだしあった。迷子になったり喧嘩したりしながら、地図の場所にたどり着いた。

小さな宝箱。

ワクワクしながらあけてみた。

乾涸びたウナギがそこにいた。

地図、古かったからかなー。

小さな教会の美しい庭園。そこで君と二人、朝食をとる。

僕の人生は順風満帆。きっとこれからも。

長い睫毛を閉じたまま、君は微笑んでいる。

朝食を終え、立ち上がる。君の体が地面に倒れた。

僕はここの神父、表向きは。

僕は吸血鬼。

白いドレスを着た花嫁の血は大層美味だ。

## 「朝」「フォルダ」「フラグ」

---

先日殺された彼はそのフォルダを開くなといていた。だけれども私は彼の死の理由が知りたい。

だから私はパソコンを立ち上げる。

パスワードは「Flag」フラグ、旗か。

その中身を読む。これは……。

気がついたら夜が明けていた。ドアがノックされる。こんな朝早く誰だろう？

## 「過信」「扇」「トラック」

---

その世界では、私は魔法使いだった。

お気に入りの扇を振り回すとトラックだって吹き飛ばせたし、呪文を唱えればご馳走だって出て来た。

あの頃、私は魔法使いだった。出来ない事なんて何も無いと、過信していた。

今の私は魔法が使えない。

子どもという魔法は解けた。

## 『露天』 『モデル』 『月』

---

月の光が差し込む、露天風呂。柔らかな光が、その白さを際立たせる。綺麗だ。

僕は彼女に一目惚れをした。

「あの、僕画家なんですけど、モデルになってもらえませんか？ お礼はしますし、ヌードとかじゃなくて！」

必死に話しかける。彼女はちらっと僕を一瞥し、一言。

「にゃー」

曇りなのか、新月なのか、わからない。満月ならばともかく、その他の日はわからない。  
掌の白い錠剤。丸くて白くて、月のようね。

飲み込む。飲み込んで、飲み込んで。

落としたガラスの破片で指を切った。絆創膏を探して、もう意味ないんだった、と思った。

けっきょくしんげつだつ

## 「船」「皇帝」「泡盛」

---

皇帝が亡くなった、と母から電話があった。

皇帝というのは、僕が子どもの頃から飼っていた犬の名前だ。当時好きだったアニメの皇帝がかっこよかったのだ。

晩酌する父の側でよく酒をなめていた。一緒に晩酌したかったのに。

実家から帰る船の上、泡盛を海へと注いだ。おやすみ、皇帝。

## 『青』 『お茶』 『残業』

---

残業中、お茶をこぼした。コピーした書類に広がる。インクが滲んでうっすらと青が広がる。  
もういやだ……。

慌ててふきながら泣きそうになる。

「手伝う」

横からぶっきらぼうに言われて、さらに泣きそうになる。

これでおっさんではなく美女の先輩だったらよかったのに、と僕は思った。



## 『青』 『アイコン』 『留守』

---

彼の留守にこっそり家に忍び込む。最近なんだか挙動不審。パソコンをいじってため息ついたり、にやにやしたり。

アイコンをクリック。そこには一面の青。海の写真。沖縄旅行プラン。

行きたいって言ってたの、覚えててくれたんだ。

がちゃり、帰って来た。

「誰？ どうやって入ったの？」

新しい名刺をにやにやしながら眺める。

これで俺も晴れて社会人だ。名刺なんて学生時代持っていなかったもんな。

満開の桜並木を通る。ひらひらと舞い散る花びらは僕の門出を祝福してくれているようだ。

そのまま流れるスタッフロール。

就活ゲームでコツは掴んだ。

現実の僕はニート。

## 『ネックレス』 『変態』 『猫なで声』

---

変態。

猫なで声で囁きながら、あたしを撫でる手。指の動きがなんだか嫌らしい。

何こいつ、絶対変態。

新しいネックレスをくれたけど、馬鹿の一つ覚えみたいにネックレスばかり。ネックレスを止める手も、なんだか嫌らしい。引っ搔いてやろうかしら？

「痛いよ、ミケ」

「みゃー」

森の中を走るその列車は緑色をしていた。保護色で見えにくい。  
だから危ないから、とママは私が一人で森に入る事を許さなかった。  
それは、私が大人になった今もそうだ。他のこともそうだ。  
私が好きになったあの人をママは……。  
ママは私を常に守ろうとしている。ママも保護色が強い。

## 「魔術」 「宣伝」 「フォロワー」

---

そのフォロワーは、宣伝厨だった。自分が気に入ったものをリンク付きでツイートしていた。多分、アフィリエイトだろう。

ただ、その人のツイートはまるで魔術のように私に購入ボタンを押させる。

クレジットの明細を見ながらため息をついた。

オフであったらイケメンだったのが悪い。

## 「みぞれ」 「電話」 「雑居ビル」

---

雑居ビルの一室、ドアを蹴りあげた。

「ほれ、ご所望のみぞれだ」

「ご苦労」

机の上に足をのせ、微笑む彼女は最高の悪魔。マジな意味の悪魔。かき氷で頭を痛くしてても悪魔。

ここは悪魔事務所。代金は高いが、この最高の悪魔がなんでも叶えてくれる。貴方のお電話お待ちしております。

「新しいネックレス？ 可愛いじゃん」

めざとい友達に言われて微笑む。

「そう、彼氏にもらったの」

「いいなー」

嘘ばかり。これ、自分で買ったのに。

「お弁当、手作り？」

尋ねると友達は頷いた。どうせ全部嘘ばかり。

あんたの家の炊飯器、ご飯が緑になってんの知ってるんだから。

## 『連絡』『すごろく』『難易度』

---

恋愛はすごろくのよう、だと思う。

一つずつマスを進め、一つずつマスの指令をこなす。さいころの目が6じゃないとデートの連絡出来ないで一回休み、みたいな難易度の高いやつ。

そして残念なことに、そのすごろくにはあがりがないのだ。

だから、結婚したここからまたよろしく。



## 「老人」「あの世」「作家」

---

筆を折る事にしたよ、とその老人は言った。一番の読者である伴侶に先立たれ、これ以上作家を続けている意味がない、と。

数年後、届いた訃報。

僕にあてた手紙には

「あの世ではベストセラー作家になるさ。君がこっちにきたらまた編集者として宜しく」

結局、生涯あの人は作家だった。

## 「秋」「戦争」「騒音」

---

上から激しい物音が聞こえた。

上の階に住む、同棲カップルは週に1度喧嘩をする。派手な喧嘩で、いつも私は迷惑している。その行為を私は戦争と呼んでいる。

そろそろ騒音に対して苦情を言ってもいいかもしれない。

カノジョは去年の秋に出て行ったのを私は知っている。今は一人なのに。

## 『包丁』 『模様』 『赤』

---

中学の調理実習で、ひたすら包丁を研ぐ子がいた。変な模様がついたお皿の裏を使って包丁を研いでいた。

昨日同窓会で再会した。理由を聞くと、その子は赤くなりながら「マンバに憧れてたの。それでなんとなく形から山姥に……」

すげー発想。その子は今うちの台所で包丁を研いでいる。

## 「魔術」「下駄」「会議」

---

白い髭を三つ編みにした長老が、さてっと呟くと

「本日の議題は、魔法下駄の海賊版が横行していることについてです」

横で美人秘書が告げる。

「明日天気になあれっていうと絶対晴れるあれですか」

下っ端の僕はあくびを噛み殺し、時間が過ぎるのを待つ。魔術連盟の会議はいつもこんなだ。

## 『留守』『短歌』『列車』

---

しばらく留守にする、と彼は言った。短歌を作る旅にでると。

付き合って8年、彼の思いつきの行動には慣れてる。

「朝早い列車に乗るから見送りはいらないぞ」

「行かないわよ」

「それで、帰って来たら結婚しよう」

本当思いつきなんだから。

「寧ろ行く前に判子おしなさいよ」

## 「弟」「合戦」「デパート」

---

デパート合戦がはじまった。

敵は床の上で手足をばたばたさせている。疲れを見せない。手強いぞ。

ここで奥の手。

「たーくんの玩具買うと弟の分買えないよ？」

ぴたっと止まって立ち上がった。

「僕我慢する、お兄ちゃんだから」

言って私の膨らんだ腹部を撫でる。いいお兄ちゃんになってね。

## 「手首」「伝説」「エプロン」

---

彼女は伝説の番長だった。地元では老若男女問わず彼女を知らない者はいなかった。

その彼女は、エプロンを付けて俺の家のキッチンに立っている。

当時を知る皆が不思議がっていた。俺だって不思議だ。彼女にはフルボッコにされ、手首にはまだ傷が残っているのに。

可愛い嫁が振り返る。

## 「雲」「リンゴ」「増える目的」

---

体育館裏でクラスメイトの浮気調査。探偵部の活動は楽しいけれども、雲一つない快晴なのに、部長と二人

「なにやってるんですか？」

怒った声。部長の天敵風紀委員長と後ろで苦笑する朝陽ちゃん。

リンゴ色した頬が今日も可愛い。

増える目的、減る信念。彼女に会うのを楽しみにしている。



## 「花」「ガイコツ」「燃える城」

---

燃える城の二階から魔王の衣服を身につけたガイコツが落下する。

かつての囚われの姫は、衝撃で分散した骨を見て笑う。

もうすぐ助けが来る。悪魔が仲間割れしたと言って泣いてみせればいい。

魔王も騙せた、私なら出来る。

悪魔と契約した時に出来た花の形をした痣を、ストールで隠した。

寝坊した日曜日の朝、一番に目に入ったのは頬を紅葉のように真っ赤にした娘の姿だった。

その顔に熱でもあるのかと驚いた。娘の名を呼ぶと、びくりと肩を震わせた。

よく見るとそれは口紅だった。

「それは頬に塗るものではないよ」

妻が残した化粧品。化粧を教える人もいなくて、ごめん。

## 「月」「コーヒーカップ」「希薄な大学」

---

「希薄な大学？ 熱意がない？」

「いや、存在が」

コーヒーカップでブランデーをがぶ飲みしながら学長が答えた。

「魔王の呪いで新月には消えてしまう。勇者学科首席の君なら助けてくれるね」

入学要件が異世界の住人のこのRPG大学。卒業しないと戻れない。

だから僕は頷くしかなかった。

## 『名前』 『銃弾』 『責任』

---

唇が離れた。

その後、彼が耳元で呟いた私の名前が、銃弾となって胸を打った。恋に落ちた。

にやり、と彼が笑う。余裕ぶった顔がむかつく。大人だからって。

彼の胸ぐらを強引に掴み、同じことをしてやる。

「責任、とってよね」

少しだけ、彼は驚いた顔をした。その顔も好き。

「センス」

## 『ペナルティ』 『好き』 『プール』

---

冬の間、水泳部は陸トレになる。

筋トレもランニングも嫌いな彼はよくさぼっていた。

結果、ペナルティとしてプール掃除を一人でやることになり、ぶーたれていた。

それでも大切なものだからと、頑張る彼が好きだ。そして、なんだかんだでこっそり手伝う部員皆が。

モップ片手に微笑んだ。

「責任をとるよ」

と何故か上から目線で言われた。

夏休みの部活後のプールサイド。

苛立ったようにあいつは

「祐二の土産のタルト！お前の分食べちゃったから！今度奢る！いつが良い！」

「何、デートのお誘い？」

からかうように言うと、あいつの顔が急に赤くなった。のは、夕日のせいだ。

## 「フィガロの結婚、麦藁帽子、広間」

---

立派な広間を抜け、応接室のソファーに座った。彼女が何も話さないので僕は  
「次、劇団でフィガロの結婚をやるんだけど」

「行けない」

目に涙を浮かべて彼女は

「結婚するの。わかって、私はもう麦藁帽子を被って一緒に走り回ってた子供じゃない」  
金持ちのお嬢様だ、仕方がない、失恋だ。

## 「罨、珊瑚、ベルサイユ」

---

「文句があるならベルサイユへいらっしゃい」

喧嘩の後、彼女は言った。この喧嘩自体が罨だと気づいた時には遅かった。

ホテル、ベルサイユ。所謂ラブホテル。

誕生石の珊瑚がついた指輪を差し出す。

「もっと他の場所でプロポーズしたかったね、僕は」

「言ってみたかったのよ、あの台詞」



## 「天井、切符、ブレザー」

---

高校の制服を久しぶりに出した。

ブレザーのポケットに一枚の紙。切符みたい。現在→過去と書かれていた。

「過去に戻ってやり直しません？」

いつの間にか駅員が隣に居た。

それは魅力的だ。高校生活は最悪だった。

でも、今幸せなんだ。

「天井できたよー」

妻の声が僕を現実に戻す。

## 「踊り子、高校、情」

---

普段本なんて読まない恋人が珍しく読書している。

「何？」

「伊豆の踊子」

「読んだことないなあ」

「高校の時授業でやらなかった？」

「授業でやるんだ」

そうじゃないと読まないもんね、と笑うと、むくれた。

「そんなのでよく教師が務まるよね、センセ」

だって俺、情報科の教員だもん。

## 「ホットドッグ、牡牛座、荒野」

---

「今日最も運勢が悪いのは牡牛座の貴方。そんな貴方のつきを回復させるラッキーメニューはホットドッグ」

と、テレビが言った。

牡牛座である僕が縫う思いで見たケータイの占いには、ラッキープレイス荒野とあった。

今日は彼女の誕生日。予定を変更して荒野でホットドッグを食べよう。